

お囃子のリズムに胸を高鳴らせて



“撮っておき” の たかはま

【第45回】

「ひと」「もの」「文化」などなど、有形・無形を問わず、高浜市の日常の暮らしの中にあるとおきの「お宝」を紹介します。



▲夕方、「ヒケ」のときは提灯に灯りがつき、幻想的



▲伊藤俊文さん
太鼓も笛もこなすオールマイティー奏者

チャラボコ

毎年10月、市内各所で行われる「おまん」と。この祭礼とともにあるのがお囃子の「チャラボコ」だ。西三河独特のものといわれ、太鼓のカラッとした音色、テンポの早いリズムが響くと、まちは一気に祭りの雰囲気包まれる。基本のリズムを表現した言葉が「チャラボコ」だというのが、例えば高浜地区と吉浜地区では異なる部分があり、さらには、同じ高浜地区でも上と下の違いもあるのだとか。提灯をさげた囃子車の仕立ても少しずつ違うという。奏者は小学生から20代の若い世代が中心だが、OBたちが熟練の腕を披露して観客を魅了する場面も。

15年以上続けているという高浜地区の下囃子連の伊藤俊文さん(稗田町)は「小さいころから、祭りにいくと馬よりもお囃子の方がより眺めていたようで、そんなに好きならと誘われて小学2年生で始めました。中学・高校時代も続け、大人になるにしたがって意識が変わりました。とにかく太鼓が好き、という気持ちに加え、歴史あるお祭りを守っていかなくてはと思うようになったんです。」と、伝統芸能チャラボコへの想いを語ってくれた。社会人になって一時離れたものの「やっぱり気になって」再び参加。「今は子どもたちの指導もしています。お祭りの後、『楽しかった!』と言ってくれるととても嬉しい。子どもが楽しいと祭りは盛りあがるし、まちの大切なものが引き継がれます!異年齢の人と関わり、学校では習わないことを学べる場だと思うので、たくさんの子に経験して欲しいですね。」

駆け馬が「たかはまの男気」だとすれば、お囃子は「たかはまの粋」なのでは。秋空の下、祭りのポルテージをあげていく立役者「チャラボコ」。また来年、お楽しみに。

LEIA A PÁGINA EM PORTUGUÊS!

ポルトガル語のページを読んでください!(P27)

広報 たかはま

編集・発行／高浜市役所総合政策グループ

〒444-1398 愛知県高浜市青木町四丁目1番地2

TEL (0566) 52-1111 FAX (0566) 52-1110

<http://www.city.takahama.lg.jp/>

電子メール info@city.takahama.lg.jp

早期配布にご協力ください。



VEGETABLE OIL INK 広報たかはまは植物油インキを使用しています。